
晩夏の彼岸花

シルヴィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晩夏の彼岸花

【Nコード】

N93570

【作者名】

シルヴィ

【あらすじ】

俺達SOS団、団長命令に従い、カ一杯、夏休みを満喫させられていた。

が、何かがおかしい。何だ？このモヤモヤは？この景色、つい最近見たぞ。

そう、こんな景色。夏にありえない色の景色…

「朝比奈さん、何がほしいですか？」

「そうですね、あのお菓子の詰め合わせがいいです。」

「承知いたしました。」

俺はこの世に舞い降りた奇跡のエンジェル朝比奈さんの浴衣姿を存分に眺めていた。エンジェルをエスコートする長身イケメン野郎を視界の外に置くことも忘れないが、すれ違う人々がみな振り返るような美男美女2人、とにかく目立ちまくっていた。

「あの2人、決まってるわね。」

「ツラがいいからな。」

朝比奈さんと古泉は射的の屋台で遊んでいた。周囲のヤジ馬が、彼女に頼まれた景品を彼氏が華麗にゲット！というシーンを期待しているのがわかる。古泉はライフルもどきを構え、狙いをゆつくりと定めていく。

「ん？」俺はその姿も妙な既視感を覚えた。さっきから何回も俺を悩ませる既視感。だが、この既視感は何かが違う。でも違いがわからない。俺はギャラリーの間から見える古泉は、まるで昔からライフルを扱っているようなフォームで構えていた。獲物を狙う目付き、全身から燃え上がる殺気。隣にいた朝比奈さんも少し怯えた様子だ。おいおい、古泉。いい年して祭りの屋台でマジになるなよ。

「あつたりー！！」

ギャラリーの拍手。ホッとしたような古泉。拍手をする朝比奈さん。

「はい、お約束どおり当てましたよ。」

「すごい、すごいです、古泉君！」

ハルヒは俺と長門を連れてギャラリーの中に割り込んだ。すると、ライフルの銃口が俺を捕らえている。

「わっ！」

珍しく、子供の様な笑顔を浮かべる古泉。あの野郎、祭りのおもち

やとはいえ、俺にライフルを向けるとはいい根性じゃねえか！

「冗談ですよ。長門さん、何か欲しいものはありますか。」

「あれ。」

長門が指さしたのは、怪しげなぬいぐるみ。どうみてもピ チュウのパチもんだ。

「わかりました。では。」

ハルヒはハルヒで自らゲームに参加するが、コルクで出来た弾に苦戦して、見事に全弾はずした。あのハルヒがすべて外すとは正直、意外だ。

「何で古泉君みたいに飛ばないのよ！」

「そりゃ、お前の撃ち方が悪いんだろぅが。」

「だったらアンタもやってみなさいよ！」

はい、俺もやりました。見事にオールハズレ。いや、一発は惜しかったんだけどな。ちなみに古泉は長門のリクエストにも一発で応えた。

「はい、長門さん。」

「見事。パチパチ」

その後、俺達はまとめて花火もやった。花火をしながらも俺はまったく手のつけていない、夏休みの宿題のこと、頻発するわけのわからない既視感に、脳ミソの容量を喰われて花火に集中できなかった。そういえば、昨日プールに行ったときも古泉が妙なことを言っていた。憂鬱そうな長門。見知らぬ子供を連れたハルヒのセリフ。

何かがおかしい。いや、これらは今までにも感じたことだが、先ほど、新たな既視感が加わった。

ライフルを構える古泉一樹。俺はどこかで見たような気がする。いったどこだ？何でアイツがライフルをもっていたんだ？いつの祭りだ？それともゲーセンで射撃ゲームでもやったのか？

わからん。思い出せない。

次の日、俺は夜中の電話にたたき起こされた。思いつきり文句を言
つてやるうと思っただが、女性のシクシク泣く声に一気に体感温度が
氷点下まで下がった。ついにあの世と繋がったと思っただぜ。

「あ、朝比奈さん！」

「どうも、古泉です。」

「何でお前が朝比奈さんと一緒にいるんだ！」

「今から来ていただくことは可能ですか？」

「すぐ行く！何処だ！」

叫びながら血の気が引く。午前2時、泣いている朝比奈さん、妙に
さわやかな古泉。俺は最悪の想像をしてしまった。朝比奈さん、待
つていてください！古泉の野郎は俺がブチのめします！

いつもの北口公園へ行くと、嫌な音と若い男の怒号が周囲に響いて
いた。

「すみませんが、ナンパは他所を当たって下さい。」

「くそっ！」

いかにもガラの悪そうな男3人が捨て台詞を吐いて去っていく。

「すみません。こんな時間に。ああ、先ほどの方々は、朝比奈さん
と長門さんに声をかけてきたので、お誘いを丁重にお断りさせてい
ただきました。」

全員足蹴りにして「丁重」か。まあ、俺もそれは同調するが、何で
お前がこんな時間にハーレム状態なのかきつちりと、説明してもら
おうか。

「キヨン君、わたし、未来に帰れなくなりましたああああ！」

「え？あ、あの…？」

俺は驚愕の事実を3名から聞かされた。9月1日以降の時間は存在
していないと言っただ。つまり、時間の流れが8月31日でリセッ
トされるから、当然それ以降の時間に存在する未来に朝比奈さんは
帰れない。8月17日から31日までを繰り返していること。普通
はリセットされる記憶が俺や古泉にはわずかに残り、既視感となっ

て表れていたこと。何よりも恐ろしかったのは、長門が継げた数字だ。

「繰り返しは、1万3千345回目になる。」

驚きの余り、俺は声を失う。朝比奈さんの涙声は3割増し、古泉が笑顔を捨てて、マジ面で地面に目を向ける。古泉曰く、ループの原因は「涼宮さんが夏休みに何やら遣り残したことがある、らしい。」だそうだ。ハルヒはつくづく、しょうもないことを宇宙規模で展開するやつだと実感した。

だが、俺達は結局それらしいことを見つけられず、運命の8月30日を迎えた。俺は吐きそうなほどの既視感を感じ、ハルヒを喫茶店から出させるわけにはいかないと思いながらも、失敗した。「今回も、ダメ、でしたね、長門さん。」

「そう。ループ確定。」

「諦めたらダメです！つ、次こそはがんばりましょう！」

俺達も解散することにしたが、俺はもう少し3人を観察すべきだった。スマイル仮面を武庫川に投げ捨ててきたような古泉の悔しさむき出しの顔、3ミクロンほど下を向く長門、嗚咽を漏らす朝比奈さん。

ここにヒントはあった。あったのに…。

8月31日 ループ脱出から諦めた俺は、何となく長門のマンションへ足を向けた。どうせ、また8月17日に戻るのであれば、今更宿題なんかやつても無駄だ。この2週間、何となく疲れきった表情を時折浮かべていた長門をちょっと元気付けてやろうと思ったのだ。その時、どこかで風船が割れたような音がした。

「んー！」

俺も、俺の周りにいる通行人もざわめく。同じような破裂音が連続して聞えてきた。それに呼応するように上がる悲鳴。だが、破裂音はなおも鳴り響き、そのたびに大勢の人が血を流して倒れていく。気がつけば道路も、家の壁も何もかもが赤く染まり、世界中が赤く

なっていた。

「痛い、痛いよ。」

「助けてくれ！助けて！」

「お父さん！お母さん！うああああん！」

ちよつと妹と同じ年くらいの女の子が俺のそばで泣いていた。近くには父親と母親らしき人が血を流して倒れている。

「君…娘を…助けてくれ。」

「お父さん！」

その女の子の手を取ろうとした時だった。女の子の頭から血が噴出した。俺は何が起こったか全くわからなかった。

「君！ここは危ない！早く避難しなさい！」

「あ、でも女の子が…！？」

女の子は頭から血を流しながら、うつろな眼で真夏の空を見上げていた。誰かに撃たれた。俺の目の前で誰かに撃たれ、女の子は死んでしまった。

「うわあああああ！」

今度は俺に避難を呼びかけた警察官が悲鳴を上げる。俺は思わず目をそらした。だがその後には襲ってきた嘔吐感に耐え切れなかった。

今まで経験がない、濃厚な血の匂い。街中がその匂いに満たされていて、はたして生き残った人間が吸える酸素はあるのだろうか。血の川となった道路を、時折足をとられながらも、何とか転倒せずに必死で走ると、幸いな事に一件のコンビニが見えてきた。今、俺の置かれている状況が、どんな理由があれ、これは異常事態であり、しかも、危険な状態であることはすぐに判断できたので、俺は、コンビニに入って身を潜めた。かろうじて逃げてきた人達も同じように身を隠している。

これは何なんだ？いったい何が起こったというのだ。俺はただ、長門を元氣付けようとして、出かけただけだ。白昼夢か？ループが確定した夏休みに絶望した俺が夢の世界を彷徨っているのか？

俺はコンビニに身を潜め、ハルヒ、朝比奈さん、古泉に連絡を取る

ために携帯を取り出した。

「キヨン、どうしたの？」

ハルヒ！繋がった！やった！！

「乱射事件だ！絶対に家から出るんじゃないぞ！」

「はあ？アンタ何を…」

ハルヒの背後から明らかに銃声の音が聞こえた。それも1回ではない。

「え！？」

「ハルヒ！何があった！ハルヒ！ハルヒ！返事をしろ！」

ドサツと言う音、うめき声だけが携帯を通じて俺の耳に入ってくる。やられた。家族全員やられた。そして「犯人」がハルヒの携帯を切りやがった。俺は何度もハルヒの携帯にかけてたが、無常にも「電話にできることができません」コールの繰り返しだった。

そして朝比奈さん、古泉にも連絡するが、結果は同じだった。

「誰かが無差別発砲をしてやがる！」

血を流した人がコンビニに飛び込んできて、俺は、他に逃げ込んだ無傷、あるいは軽い怪我で済んだ人と、コンビニの店員さんたちで簡単な手当を始める。あつという間に床が赤黒く染まり、俺のスピーカーにも赤い染みができるが、緊急事態だ。そんなことはどうでもいい。

やがてサイレンを鳴らした救急車とパトカーがやってきたので、鳴り響いていた銃声が止まった。コンビニへ逃げた人のうち何人かは、駆けつけたパトカーに安心してコンビニを出て行ったが、警察官や救急隊員、逃げた人対して平等に銃弾の雨が降りそそぎ、目の前のアスファルトを赤く染めた。

「おいおい、警察や救急車に乱射って、おかしい。狂ってる！」

「誰か、誰か助けてくれ！」

大勢の人々が光陽園駅に向うが、「狙撃犯」はどうやらお見通しのようで、あつという間に駅前が地獄絵図となり、マールンカラーの

車両までもが赤く染まり、一部の弾丸は列車の窓を割って乗客に襲い掛かった。たまらず外へ避難した乗客に浴びせられる第2波が彼らに引導を渡す。血、内臓、脳漿、かつて人間だったものが道に、壁に、街路樹に飛び散り、いまや俺にはここが自分の住む街だとは思えなかった。俺はここから逃げるべきだろうか。いや、もう俺はどうでもよかった。どうせ、明日は、9月1日は来ないことが決まっているからな。でも死んだらどうなるのだろう。

p r r r r r r r r r

俺の携帯が鳴る。発信者は「古泉一樹」となっていた。やった！こいういふ事態に一番強く頼りになるやつから連絡がやってきたのは超ラッキーとしか言いようが無い。

「古泉！お前は無事か！？」

「ええ。僕は大丈夫です。あなたが無事でよかったです。しかし、とんでもない事件が起きました。」

「いったいどうなってるんだ。「機関」もお手上げか？」

「ええ。実は、僕も現場近くにいたのですが、危険を感じて近くの建物の屋上に避難しました。」

「屋上」と言う言葉に少しひっかかったが、俺は古泉に場所を教えてもらい、合流することにした。

ところが、そこにいるのは古泉たった1人だった。

「お前、1人なのか？」

「ええ。涼宮さんも朝比奈さんも長門さんも、連絡がとれません。それに、これです。」

古泉が眉をひそめて視線を向けた先、そこは血の海と横たわる元人間。さつきも吐いたのに、俺は思いつきり吐いてしまった。逆流した胃液が喉や口をひりひりさせる

「大丈夫ですか？」

「…お前はどつなんだよ…ウッ！」

「僕は大丈夫です。これぐらいの景色は閉鎖空間で見慣れていますが、さすがに死体と一緒に長時間身を潜めるのは気持ちの悪いものではありません。でも、僕がここに避難したときは既にこうなっていました。」

俺は周囲の状態を確認しようと思い、屋上のフェンスにむかった。

「ぐえっ！」

「フェンスに近づいたら危険です！どこに犯人がいるかわかりません！」

古泉が思いつきり背後から首根っこを掴んできたので思わず咳き込んで、座り込む。屋上のコンクリートは熱したフライパンのような暑さだ。マジで目玉焼きができそうだな。

「でも屋上ですから、多少の風もありますね。」

「ああ。でも、これからどうするんだ。いつまでアレと一緒にいる気だ？」

一瞬、吹きぬけた熱風に花火の香りが含まれていた。こんな真っ昼間に花火？しかも強く煙の匂いが漂う。またどこかで乱射が始まったのか？

「古泉、屋外は危ない。とりあえず中に入ろう。」

俺は声をかけながらも小走りで階段へ走っていた。このままだと熱射病になりそうだし、やっぱり屋内のほうが安全だと思ったのだ。

だが古泉は屋上に立ったまま、俺に背を向けて一步も動かない。

「大丈夫、ここは周辺で一番高い場所です。狙撃犯は比較的高い場所から標的を狙いますから、ここにいるほうが安全ですよ。」

「ほう。えらく自信たっぷりだな。」

「ええ。」

振り返った古泉は、俺の知っている古泉一樹ではなかった。体の一部のように構えられた大きなライフルが俺の頭をミリ単位で正確に狙っている。

「古泉？何の冗談だ？」

「言ったでしょう？ここは安全な場所だと。理由はたった一つ。狙

撃犯はここにいますからね。」

「な！お、おい、ちよつと落ち着いてくれ。待て！」

「何度も何度も繰り返される夏休み。長門さんに伺ったところ、あなたや朝比奈さんが気づく前にも、僕は既にループに気づいていたようです。以前は完璧に記憶がリセットされていましたが、最近は完璧にリセットされない状態で、何度も何度も既視感に襲われる始末。そう、こうやってあなたにライフルを向けている景色も、もう何度見たでしょうか。」

「ま、待てよ。だからって何で関係のない人達まで撃つんだ！」

「どうせ明日になったらやり直しです。だったら華々しくやってしまったほうがスッキリしますよ。誰がどこで死のうが関係ない。世界は全て、8月17日に戻るのですから。みんな何事もなかったように8月17日に戻って再び生きるのです。この2週間をね。」

普段のとってつけたような微笑こそ消えているが、俺には古泉の様子に変化がないように見えた。だが、切れ長の目に踊り始めた静かな狂気。ヤツは少しずつ嗤い出す。目の中の狂気はやがて激しく燃え出して精神的に俺を追い詰めてきた。俺は狂った眼光に屈した。ひたすら視界に古泉が映らないようにするのがせいっぱいの抵抗だった。

確かに古泉一樹は狂っていた。完全に狂っていた。俺が昨日まで見ていた古泉一樹はいなかった。何度も何度も夏休みを繰り返すことにより、とうとう精神がやられて発狂したのだ。長門のように完璧な記憶は持っていないのに、既視感の蓄積だけで発狂してしまった。おかしいじゃねえか。古泉が発狂するなら、別に俺や朝比奈さんが発狂してもおかしくない。

「あなたや朝比奈さんは発狂なんかしませんよ。」

「人の考えを読むな。」

「読まなくても僕にはわかります。今の段階であなたたちお2人が異常行動に出ることはありません。」

「どういう意味だ。」

「明日は、絶対に、来ない。だから、これぐらい、やっても、いいでしょう?」

俺は発狂した同級生に飛び掛った。しかし、ライフルを持っている相手にかなうはずもなかった…。

「あはは、長門さん。またやってしまいました」

「そう。」

古泉一樹がわたしに向ってライフルを構える。訓練された美しい姿勢がわたしをひきつける。

「もう、同じことを繰り返すのは飽きましたよ。それに僕は、彼や朝比奈さんよりも前に気がついたので、何度も気が狂いました。無論、全てを記憶している貴女のほうが大変だと思えますが。」

そう言って古泉一樹はライフルをおろし、銃弾の補填をはじめた。

「わたしは人間ではない。大丈夫。」

「今回、僕が何人射殺したかわかりますか?」

「現在、死亡者82名。負傷者227名。最終的な死亡者は1000名を越えると推定。」

「なんだ。意外と生きているものですね。まあ、銃弾はまだあります。貴女もこのカーニバルに参加しませんか?」

「わたしの義務は観測。わたしからのアクションは許可されていない。」

「では観測がてら、屋上まで一緒にしましょう。」

「…(コクリ)」

ライフルを抱えた古泉一樹とともに屋上へ。かつて5人で天体観測をした場所。子供のように楽しそうに笑って天体望遠鏡をセットする古泉一樹。あの天体望遠鏡はライフルに変わり、無邪気な笑顔は狂った嗤いに変わった。それでいて心の底から楽しそうに、次々と発砲を繰り返す。付近の道路が赤い。何もかもが赤い。世界が彼岸花で埋め尽くされたように赤い。

「長門さん、赤い色がとても綺麗ですね。でも、もうすぐ終わりで

す。夢が終わります。」

愛用の腕時計で時間を確認し、もうすぐ時計の長針と短針が一番上の数字を指すことを確認してライフルを降ろした古泉一樹が、わたしの隣に座り込んだ。

「また、繰り返す。繰り返す夏。終わりのない夏。まだ続く夏。嫌です。もう、嫌だ。」

「…」

涙交じりの声で古泉一樹はうなだれる。

「夏を繰り返すたびに、僕はおかしくなり、こうやって殺人を犯していく。僕だけが罪を重ねていく。どうして僕だけがこんな罪を重ねていくのでしょうか。なぜ？長門さんならわかりますか？」

「考えないほうがいい。」

「長門さん、僕が初めて銃を撃つたのは中2の頃でした。反動に耐えられず尻餅をついてしまったけど、みんな誉めてくれました。」

「そう。」

「ライフルを初めて撃つたのは、中3の時です。わけもわからずに倒れていく標的、慌てふためく周囲の人間ども…あはは、今思い出しても愉快でたまらない。」

いつもの貼り付けられた笑顔ではなく、心の底から明るく笑う古泉一樹。これほどの大惨事さえ、今の彼には「夏の思い出」の1つでしかない。その感性に、情報統合思念体も、わたしという個体もループの度に驚きつつ、大きな興味を持っている。

「次のループで、また僕はお祭りで射的をやるのでしょうか。ループが確定すれば、僕は再び凶行に走るのでしょうか。」

「わからない。」

「もうどうでもいいですよ。どうせまた終わらないでしょう。そして僕は罪を犯す。それだけ。」

「よかつたら、ここで寝る？」

わたしは自分の膝を指差した。

「いいのですか、長門さん。今回の僕達は特別な関係ではないでし

「よう?」

「構わない。」

古泉一樹はライフルを抱えたまま。わたしの膝で眠りにつく。1万3千345回目のシークエンスの終焉がまもなくやってくる。

「なぜ、あなたは先に気がついてしまったの?」

そう。なぜ古泉一樹だけが気がついたのだろう。わからない。何度分析してもわからない。時間という概念上で起こるアクセシントなら朝比奈みくるのほうが先に気がつく可能性が高いはずなのに。

「なのに、どうして、あなたなの?」

古泉一樹が最初にループに気がついたのは231回目のシークエンス。彼と朝比奈みくるがループに気づく前に、古泉一樹は時間の繰り返しに気がついた。初めて3人揃ってループに気がついたのは4653回目のシークエンス。その間、古泉一樹1人だけが気がついたシークエンスは3988回。

それ以降、古泉一樹が単独でループに気づくことがなくなった。3人揃って気がついた回数は7212回、その回数に単独でループに気がついた回数を加算すると、実に1万1千200回も古泉一樹はループに気がついたことになる。その回数の差が、古泉一樹の精神を蝕み凶行に走らせている。単独で気がついたシークエンスを含め、たすべてのシークエンスで、古泉一樹はわたしに相談を持ちかけ、脱出するために様々な努力をするがすべて失敗。回を重ねるごとに最終日の8月31日に精神異常をきたして無差別殺人に走るようになる。ループの回数が多くなるほど犠牲者が増加した。

今、わたしの膝で、子供のようなあどけない寝顔で眠る古泉一樹。わたしも、朝比奈みくるも、そして涼宮ハルヒも、いずれかのシークエンスで彼と古泉一樹、どちらかと交際していたこともあった。だが、いずれのシークエンスも脱出できず、脱出する方法としての「男女交際」は無意味に終了。

この1万3千345回目のシークエンス、全員がループに気がついた。わたしは8月31日の行動だけが気になった。だが、ループの

脱出に失敗して古泉一樹は凶行に走り、人も、街も彼岸花の色に変わる。世界の色だけが秋の色に染まり、夏が悲しい思い出になる。だが、明日になればまた大切な「人」たちに会える。たとえループで戻された「明日」でもわたしはそれを期待する。

そして1万5千498回目のシークエンス、彼はついに涼宮ハルヒの「やりのこしたこと」に気づいた。

これで他人の血が流れない。もう古泉一樹が殺人の記憶を引き継ぐこともない。

夏の彼岸花は二度と咲かない。わたしはただそれを喜んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357o/>

晩夏の彼岸花

2010年11月15日19時58分発行